

人生にはやはり思いがけないことが多い。多忙な日常の合間を縫って、このところ私は、郷里の信州松本に帰省する週末が続いていた。六月初旬に二十三回忌を迎える父が生誕かけて書き残した膨大な量の日記を、その日までになんとか読み終えようと決意したからである。その折のこの四月二十二日の日曜日のことであったが、私はついにわが家の祖先の墓を探し当てた。こんな書き方をすると、いささか奇異に思われるであろうが、それには若干の理由がある。

父は、ごく幼少の頃、わが家の墓地のある大松寺に隣接するやはり女鳥羽川畔の、いまは荒れはてた鐘樓のみを残す廃寺・念来寺の墓に祖先を

中嶋嶺雄

六の小説「大番」の登場人物で松本から上京して明治後期

腹を差したという、わが家のと、三基のうち二基はもう三代前の分家筋の中嶋豊次郎 大分傾いてはいたが、文化、文政から弘化、嘉永を経て明治にいたるわが祖先の墓石が

女鳥羽川の辺

中心を流れる女鳥羽川(めとばがわ)に面した大松寺に六年前の夏、念来寺を訪ねて探したこともあったが、やはり地方の曹洞宗の名門・全久院の檀家でもある。従って、二つのお寺にお世話になっているのだが、わが家には、墓石のない古い位牌が伝えられてきていた。

緑青(ろくしょう)の色の瓦が蒼むした念来寺鐘樓は、家祖先の位牌の一部を保存しているらしい

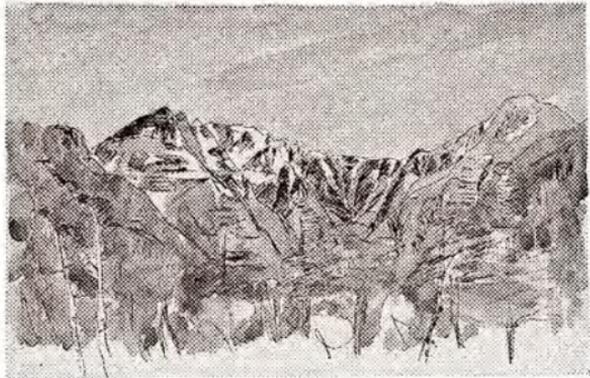
たまたまある偶然からわが家の遠い親戚筋の古者が中嶋家祖先の位牌の一部を保存しているらしい

「中嶋」の姓もくつきりと現存しているではないか。

ついに見つけ出した

「中嶋」の姓もくつきりと現存しているではないか。

或る発見



穂高連峰

そほ降る雨の中で私は、時の流れに抗(あらが)って残っていたわが祖先の墓石をおかず眺めていた。聞くところによると、念来寺の無縁仏は、近く整理される予定だったという。そこから見える片倉製糸の跡地は、いま、大きなスーパーマーケットになっ

ていて、遠く背後に見えかくれる鉢伏山(はちぶせやま)にはまだ春雪がかなり残っていた。(東京外語大教授・国際関係論、絵も)

一市井人の昭和史

私の父は昭和初年から昭和

四十二年六月の死の二日前まで、実に丹念に毎日の日記をつけていた。貧窮のなかで育った父が一人前の庶民としてみずからの生業（薬局経営）の道を固め、晩い結婚を果たした三十代初期からであり、当初は俳句日記のかたちをとっている。いわば歳時記風に日記をつけ始めたのである。しかし、そのうちに商売の様子とはもとより、町内の模様、祭や市のこと、当時はごく手軽な保養と湯治の場であった浅間温泉の情景、家族・親戚・隣近所の日常、そして一人ツ子の私が生まれてから

はわが子の成長についての克明な記録となり、ときには政局・戦局・時局にも触れていて、一市井人の昭和史、山国

の城下町・松本の風俗史として見れば大層なものだと感心させられる。

父は、俳句の道に励んでい

た一種の地方文化人でもあったので、女鳥羽川を背にした松本市中町のわが家には松村巨湫（「樹海」主宰）、栗生純夫（「科野」主宰）のよう

な石橋系の俳人や歌人の若山喜志子先生（牧水夫人）などがよく来宅された。わが国洋画界の泰斗・石井柏亭画伯や夭折した信州日本画壇の鬼才

女鳥羽川の辺

中嶋 嶺雄

・山口蒼輪氏、私も絵を教え

ていただいた日本水彩画会

の白山卓吉先生、山岳画家の古

本市幸利先生らが出入りされた

り、父と親交をもったりして

いたので、父の日記はそうした地方文化の交流誌にもなっている。

満91歳の鈴木先生
松本在住の文化人といえ

ば、私がヴァイオリンを教え

ていただいた鈴木鎮一先生を

さ

れて

い

て

い

て

い

て

い

て

い

て

入った真町にあった。父はそ

の松本音楽院のPTA副会長

もつとめていたことを私は父

の日記で今回確認した。当時

の鈴木教室にかんする細かな

メモや音楽院

内部の若干の

角彦なども記

されて

い

て

い

て

い

て

い

て

父の中の日記

録となっていて、一度生死の

はさまをさまよったときの記

述など、そのリアルな描写

に圧倒される。

死の一年半前の昭和四十

一年十二月には、この日記わ

れ

た

のであ

らうか。

か。

か。

か。

か。

か。

か。

か。

のちに公表されることを意識

して書き残すかもしれない。

しかし、そのような機会もあ

らうはずのない父が、なぜか

命感に迫らたてられながら、

父の日記の完結を決意したの

であった。

か。



私のヴァイオリン

個の精神史がおそらく永遠に

闇に消えてしまつてあろうと

思ったとき、私はある種の使

命感に迫らたてられながら、

父の日記の完結を決意したの

であった。

か。

思わずたじろいだ

その父は、日記の随所であ

ふれるばかりの愛情を私に注

いでくれているのだが、その

父にして、昭和十九年七月七

日のページでは、「支那事変

発生より七周年、……やがて

は嶺雄も召されて征く日がく

る。サイパン島、小笠原島ま

で敵は進攻して来てゐる。」

と書いている。この父にして

こう書かした戦時下の父の

心理とその非情の筆致に私は

一瞬ギクリとし、思わずたじ

ろいのであった。
(東京外語大教授・国際関
係論、給も)

柳絮舞ふ河岸をゆくなり萩
売り

（『共同句集すががき』より）

右の句は、私の父が昭和九年頃に女鳥羽（めとぼ）川畔の光景を詠んだものである。信州松本は周知のように北アルプス山麓の城下町で、現在

も市の中心には女鳥羽川が流れているが、柳絮りゆうじよが舞い、萩（わらび）売りの呼び声が聞こえるといった長閑（のどか）な風情からは程遠い。それでも子供頃には、河岸の縄手通りに大道商人が立ち並び、香具師（やし）が大声で客を集めていたりして、四囲の山並みとともに、俳句の題材には事欠かない環境であった。

気にかかっている

私は、俳句には素人であるけれど、子供の頃から可愛が

っていた父の俳句の師 関女工として句作を始め、進駐軍相手の娼婦はまた黒人兵に心を捧げるといふ生活を表現（俳句の「格」）をことごとく送っていたというが、処女句集「春雷」（羽生書房、昭和二十一年）で慧星のように登場し、父も最高幹部同人の一人であった巨湫主宰の俳誌「樹海」に集う父のような叙

松村巨湫（一八九五—一九〇九）「樹海」に集う父のような叙 巨湫編の「現



中嶋 嶺雄

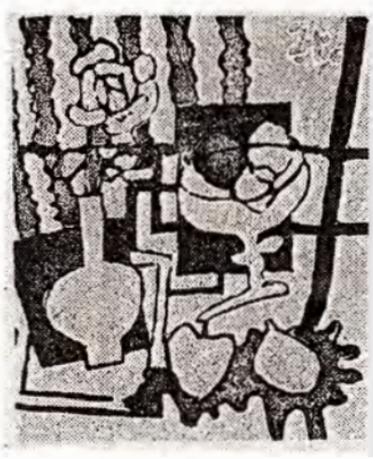
六三）と言っても、今日の俳壇ではほとんど忘れ去られた存在であろう。「現代俳句大辞典」（明治書院）などを編む、人間中心のリアリズムを（ひもと）いてみても、二、三の句と異色の女流俳人・鈴木しづ子を生んだことぐらいしか記されていない。たしかに、鈴木しづ子は、戦後、製

景・抒情型の同人のあいだで俳句表現辞典（貧文堂、昭和三年）に導かれてその門をたたき、初期の俳誌「清浄集」（父は一時その編集発行人であった）に集い、のちに東京・田端の巨湫塾に参じた

俳匠・巨湫先生

門弟であった。父の手許に残された昭和三年刊の「石楠自選句集」には、「薄つべらなうな分ち書きの晦淡な」は「截ち切りの短冊のような句」へと発展していったの「醇化（じゅんか）の足りな

父を含めて巨湫門下の同人 巨湫擁護論であったろう。



卓上のオブジェ（版画）

清貧の生涯閉じる

達筆の朱の書き込みが随所に残っていて、当時から巨湫先生はその師・白田亜演麾下の「石楠」一門の作風にはかなり批判的であったようである。これが巨湫晩年の「格は論や意味論にまで手を染めら

たちは、師の「俳句革命」に戸惑い、周囲の数少ない門弟や井本農一氏らの若干の俳友を例外として、次々に巨湫先生を去って行った。音韻色紙が壁に掛かっている。（東京外語大教授・国際関保論、版図も）